特集「私たちはなんで友達になるんだろう？」

理想像に振り回されるな！カテゴライズの一歩先へ

第57講 1限目

文化人類学

長沼さやか先生と考える他者を友達と名付ける理由

静岡大学人文社会科学部准教授
長沼さやか先生

人文社会科学部の山は大変だから……と車で行き帰り送迎してくださいました。お優しい。

文・成田真也（静岡大学人文社会科学部二年）
写真・花島瑞希（静岡大学人文社会科学部三年）

今号編集長・古田萌黄

静岡大学地域創造学環３年生。子供の頃、ふたりはプリキュアに憧れて親友が欲しかった。

恋人や家族など名前のある関係とどこか「友達」は違う気がする。何故、私たちは親しくなった人間に「友達」と名付けたくなるんだろう。見えてきたのは、名付けに固執し窮屈になっていた私たちの姿だった。

長沼先生　友達は「儀礼を経ない面白い人間関係」だと思います。私の専門である文化人類学はフィールドワークを主な研究手法としています。長い期間現地に住み、その地の人と接することで、自分が今まで当たり前だと思ってきた考え方や価値観などを見直し、人間とは何か探求する学問です。

文化人類学の古典的な研究テーマの一つに儀礼があります。儀礼とは、人の社会的地位や人間関係の変化を明確に示すものとして、人間社会では共通して必ず行われています。例えば、昔であれば元服、現在ならば結婚式がわかりやすいかと思います。

「儀礼」と言うと仰々しいですが、より広い意味で「決められた手順を踏むこと」だと捉え直すこともできます。ですから、公的に男女の関係を夫婦であると示す婚姻届、あるいは血縁関係がなくとも親子だと証明する養子縁組届などの「手続き」も儀礼の役割を果たしていると言えるでしょう。

私たちは、人間関係を認知する時、無意識に儀礼及び手続きを重視しています。一方で、「今日から君は友達だ」というように明確な始まりがないにも関わらず、「友達」という名前の人間関係が存在している。それは、とても面白いことだと思います。

友達は手続きを経ない珍しい人間関係

―儀礼や手続きといった明確な始まりがないのに、友達という関係が成立しているのは確かに不思議です。先生は中国広東省珠江デルタでフィールドワークをされているそうですが、現地における「友達」はどのような存在なのでしょうか？

長沼先生　中国語では友達を「朋友」と言い、広東においては人間関係の濃いものから薄いものまでを含む総称のように使われています。十七年ほどフィールドワークをしていますが、一度楽しく飲み食いした関係もビジネスライクな関係もまとめて「朋友」と名付けるのだからびっくりしますよね。

「朋友」は関係性が深まると、より関係を具体的に指し示す語に変わります。現地で同性の友人の家に滞在中、ずっと同じベッドで寝起きしていました。すると友人は私を「閨密」（「閨中密友」の略、「閨」は女性の寝室の意味）と呼ぶようになりました。「女性の親友」という意味なのですが、彼女は「同じベッドで寝ている」という意味にもひっかけ

静岡時代
『静岡時代WEB』バックナンバー読めます！

て呼んでいたようです。もしかすると、中国は日本に比べ、友達に関する言葉の表現の仕方が豊かなのかもしれません。

日本において知人と呼ばれる間柄も、広東では「朋友」と呼ばれるように、日本語の「友達」と「朋友」は示す意味が違います。しかし、両者は経験や記憶、時間の共有により友達か否かを分けている点では共通しており、本質的にはあまり大差ないと思います。

友達関係は儀礼及び手続きを経ない分、不安定な関係です。そのため、友達か否かを分けるのは「感覚の共有」言い換えれば「情緒的なつながりの有無」だと言えます。そう考えれば、日本における「友達」は「朋友」よりも、より親密な意味に限定した関係を想定しているにすぎないと言えるでしょう。

―儀礼や手続きを経ない友達関係は不安定だからこそ、情緒的なつながりを重視するということですね。ですが、そもそも何故私たちは同じ経験や時間を共有した他者をあえて「友達」と呼びたくなるのでしょうか？

長沼先生　お互いの関係性に「友達」と名前が付くことで安心するからでしょう。自分と相手の関係性に名前がないと、どう振る舞えば正解なのかという指針が見えず、不安になってしまいます。お互いの関係性に名前をつける、つまりカテゴライズすることで人は心が安定し安心するのです。

一方で、それは個別具体的な関係性を覆い隠すことでもあります。例えば、私とAさん、Bさんがいたとして、各々の関係性は違いますよね。ですが、その関係性全てに「友達」と名付けることで、個別な関係そして個人の存在を見えにくくしてしまいます。

「友達」というカテゴライズが先にきて、相手を蔑ろにしてしまっては本末転倒です。友達に限らず恋人や家族など関係性に名前をつけるのは悪いことばかりではありません。しかし、「友達だから～するのが当然」というような付帯イメージを生じさせやすく、非常に窮屈で、すれ違いの原因となり得ます。

スケールは異なりますが、共生を考える上でも同じことが言えるはずです。例えば「日本人」「中国人」という民族をベースにして相手を見ても、お互いの関係性は深まることはないでしょう。だからこそ、カテゴリーで相手を見過ぎないということを頭に留めておくことが非常に重要だと思います。

―カテゴライズすることは指針になり安心を得られる一方で、個別具体性を隠す危険性もある。人間関係を見直す良いきっかけとなりそうです。最後に、先生は友達の存在しない世界ってどういう世界だと思いますか？

長沼先生　私の想像にはなりますが、呼称として「友達」という名付けがない社会は当然あるはずです。広東と日本ですら、「朋友」と「友達」の指し示す意味合いが微妙に違うように、「友」と言語的に使わない社会だって絶対あり得るはずで、その意味ではなんの問題もありません。

しかし、その社会においても、名称がないだけでお互いの時間や経験を共有した情緒的なつながりをもつ人間関係は必ずあるはずです。あえて、情緒的なつながりを有した関係を「友達」だと呼ぶのならば、その存在がない世界は考えられません。

他者とともに時間、感情、経験などを共有して生きることは、「人と人とのコミュニケーション」とも言い換えられ、「人間の普遍的な営み」なのです。コミュニケーションを廃した世界は、もはや人間の世界だとは言えず、SF作品のようなロボットだけの世界のように私は思えます。

人と人の生身の付き合いなのですから、当然煩わしさはあるでしょう。しかし、煩わしさと豊かさは表裏一体です。例えば、喧嘩をすればお互いの関係をよりリアルに感じる、有り難みを感じるというように、友達関係を通して私たちは生きる上での豊かさを得ているのではないでしょうか。

人と人の生身の関係、煩わしさと豊かさは表裏一体

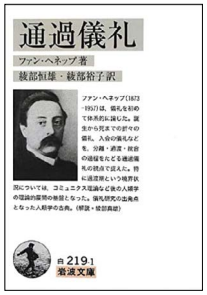
「年齢や立場が離れてる友達って憧れるよね。なんだかんだ好き放題言い合える相手が欲しいです」文・成田

「気持ちの良い関係は、相手次第かつ自分次第だと思う。「友達」という概念に囚われずに生きたい」写真・花島

一限目の教科書

長沼さやか先生

静岡大学人文社会科学部社会学科准教授。研究分野は文化人類学、中国地域研究。中国広東省珠江デルタでフィールドワークを行い、現地の人々の漢族意識、家族、結婚、日常生活における人同士のつながりなどについて研究している。



『通過儀礼』著・ファン＝ヘネップ
綾部恒雄・綾部裕子・訳（岩波文庫）

成人や結婚をはじめとする儀礼は「分離」、「過渡」、「統合」の三段階からなると定義し、共通性を導き出そうとした人類学の古典的名著。ある一定の儀礼を経験することで人生のステージが変化する、それは人間社会に共通しているのだとする考察と世界各地の儀礼の記録にきっと知的好奇心をそそられるはず。煩雑に思える儀礼の意義を問いたい方に。